国立国語研究所学術情報リポジトリ

The speech style shift in the initial encounter between advanced Taiwanese learners of Japanese and native Japanese speakers : A comparison with conversations by native Japanese speakers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 文敏, CHEN, Wen-Miin メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001888

研究論文

台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフト
—日本語母語話者同士による会話との比較—

The speech style shift in the initial encounter between
advanced Taiwanese learners of Japanese and native Japanese speakers:
A comparison with conversations by native Japanese speakers

陳 文敏

CHEN, Wen-Miin

要旨

本稿ではスピーチレベル・シフトについて初対面同士16組の接触会話を母語会話と比較分析した。その結果、上級学習者でも対人関係調整にスピーチレベル・シフトが十分に活用できていないことが次の4点から判明した。①シフトしたままの「ダ体発話」の比率が母語会話より高い。②母語会話で「ダ体発話」へシフトしやすい8つの状況のうち「情報内容の自己訂正を行う時」と「相手の発話内容に感嘆を示す時」の2つが、学習者に関してはそうとは認められない。③学習者の「ダ体発話」へのシフトには日本語能力の不足も関わっている。④母語会話と同じ状況での「ダ体発話」へのシフトでも学習者のシフトは必ずしも心的距離の短縮になるとは限らない。

キーワード：台湾人上級日本語学習者 初対面 スピーチレベルの選択
「ダ体発話」へのシフト

1. はじめに

日本語の会話では、場面や相手との関係などを考慮して基本的に「デス・マス体」か「ダ体」かが選択される。さらに、会話の途中で「ダ体」または「デス・マス体」へと切り替わることがある。このスピーチレベル・シフトという現象は日本語母語話者にも日本語学習者にも観察される。本稿では初対面の日本語母語話者と日本語学習者による接触場面の会話（以下、接触会話）を資料に、スピーチレベルの選択とそのシフトを分析し、下記の4点を明らかにする。

- i. 上級日本語学習者におけるスピーチレベル選択の実態
- ii. 日本語母語話者にも上級日本語学習者にも見られるシフトの状況とシフトの頻度
- iii. 上級日本語学習者のみに見られるシフトの状況
- iv. 日本語母語話者と上級日本語学習者に見られるシフトの機能

2. 先行研究

スピーチレベル・シフトに関わる要因として、Ikuta (1983)、生田・井出 (1983) は社会的コンテクスト、話者の心的距離、談話ユニットの展開の3つを挙げている。これらの研究をきっかけとして、日本語母語話者同士の会話（以下、母語会話）を資料にシフトの起きる条件、シフトの果たす機能に着目した研究が数多く行われてきた（三牧, 1993・2002；足立, 1995；宇佐美, 1995等）。しかし、それらの研究では、まず条件と機能が必ずしも明確に区別されていない。また、シフトの頻度を調べた実証的研究はきわめて少ない。陳 (2003) では「ダ体発話」へシフトする頻度を調査して、「ダ体発話」へシフトしやすい8つの状況を特定し、その機能が相手への親しみの表示と話しやすい雰囲気醸成にあることを確認している。

一方、接触場面における日本語学習者のスピーチレベル・シフトに焦点をあてた研究として、上仲 (1997)、陳 (1998)、佐藤・福島 (2000)、サバティニ (2001) が挙げられる。この4つの研究の中で、上仲 (1997) は相手の年齢という社会的要因の違いによるスピーチレベル・シフトの変化を調査しており、日本語学習者は相手の年齢に関係なく、確認のための繰り返しを「ダ体発話」で多く行っているが、目上の場合だと失礼になる恐れがあるので要注意であるなど、興味深い結果を報告している。

陳 (1998)、佐藤・福島 (2000)、サバティニ (2001) の3つの研究に共通する結論として、次の2点が挙げられる。

①「ダ体発話」へシフトする頻度が高い 陳 (1998) と佐藤・福島 (2000) の調査によると、日本語学習者は日本語母語話者より「ダ体発話」へシフトする頻度が高いが、個人差も大きいことが分かった。さらに、陳 (1998) は日本語学習者が一度「ダ体発話」へシフトすると、基本である「デス・マス体発話」へ戻るのが日本語母語話者より遅れるという結果も出している。その原因として、日本語学習者は日本語を話す際、スピーチレベルより伝達内容の事柄的側面に注意を払う傾向があるのではないかと指摘している。

②助けを求める時に「ダ体発話」へシフトする傾向が見られる 佐藤・福島 (2000) とサバティニ (2001) は、日本語学習者は言おうとしていることばが適当かどうか自信がなく、相手に助けを求める時にも「ダ体発話」へのシフトが起きていると指摘している¹。佐藤・福島 (2000: 23-24) がこのシフトを発話の冗長性を減らし、発言の効率化を計るものだと考えているのに対し、サバティニ (2001: 11) は、自分の言いたいことを適切に日本語化してくれるヘルパーとして相手を自分側に引き込むためであり、つまり心的距離の短縮を示すものだと見なしている。

さらに、佐藤・福島 (2000: 24) は、日本語学習者の「ダ体発話」へのシフ

トには要因が特定できないものが多いが、その多くは自立語と引用止めで終わるもので、言語運用能力の不足によって生じたものと述べている。この指摘と上記の②から、日本語学習者の日本語能力の不足も、スピーチレベル・シフトの要因として無視できないものであることが窺える。

3. 会話資料の収集と処理

会話資料の収集は日本語母語話者2名（男性1名，女性1名：以下，母語話者），及び台湾人上級日本語学習者8名（男性4名，女性4名：以下，学習者）に依頼して行った。2名の母語話者はいずれも愛知県の出身である。8名の学習者を上級と判断したのは、(A)全員来日して2年以上であり、(B)日本語学習時間数が800時間以上であること、(C)日常生活やゼミで自由に日本語を使っていること、の3点による。なお、8名のうち5名（TM3，TM4，TF1，TF2，TF4）が日本語能力試験一級に合格しているが、ほかの3名（TM1，TM2，TF3）は日本語能力試験を受験していない。

会話資料を収集した時点では、表1に示すように、全員30歳前後の大学院（研究）生である。初対面の相手と二人一組で、自己紹介から始めて自由に会話をしてもらい、計16組551分の会話を収集した。会話の後、フォローアップ・インタビューを行い、相手の属性についての判断、互いのスピーチレベル・シフトに関する言語使用意識などについて確認し、分析と考察の参考にした。

収集した会話資料の文字化及び分析の処理にはCHILDES（大嶋・MacWhinney, 1995）を使い、「発話」を分析の単位とした。発話単位は田丸・吉岡（1994）に倣って、文法、音声（イントネーション，ポーズ），意味を考慮してひとまとまりとなるか否かで認定した。発話単位の認定の詳細は紙幅の関係で省略するが、詳しくは土岐他（1998）と陳（2000）を参照されたい。なお、以下の会話例の表記には表2に示す記号を使用した。

[表1 会話資料の一覧]

参加者	JM1 (25才)	JF1 (28才)
TM1 (34才)	会話 1 (54分)	会話 2 (29分)
TM2 (30才)	会話 3 (34分)	会話 4 (24分)
TM3 (29才)	会話 5 (28分)	会話 6 (26分)
TM4 (28才)	会話 7 (38分)	会話 8 (30分)
TF1 (32才)	会話10 (67分)	会話 9 (25分)
TF2 (28才)	会話12 (39分)	会話11 (29分)
TF3 (27才)	会話14 (42分)	会話13 (27分)
TF4 (25才)	会話16 (30分)	会話15 (29分)

注：話者記号は3文字で表す。初めの記号は国籍で、Jは日本を、Tは台湾を表す。次の記号は性別で、Fは女性を、Mは男性を表す。最後は通し番号である。

[表2 会話例における使用記号]

発話末の記号	。	基本的な発話末記号。
	?	情報を要求する言い終わっている発話を表す。
	+...	言い切っていないが、言い終わっている発話を表す。
	+/.	言い切っても言い終わってもいない発話を表す。
発話末の重なり記号	<>	重なった部分は< >で括り、以下の記号で重なった箇所を示す。
	[>]	次の話者の発話にある< >で括った部分との重なりを表す。
	[<]	前の話者の発話にある< >で括った部分との重なりを表す。
その他	+,	一度中断した発話が継続することを示す。発話の最初に表記する。
	[=!笑い]	話者の非言語行動「笑い」を表す。
	[]	相手のあいづちを表す。
	yyy	日本語で表記できない表現を表す。
	%com:	直前の発話について説明する記号。

4. 分析対象の発話の認定と発話のスピーチレベルの分類

本稿では、情報伝達が終了していると判断される発話、すなわち「言い終わっている発話」に限定して分析する。

「言い終わっている発話」は、文法的または音声的に完結しているかどうかによって、「言い切っている発話」と「言い切っていない発話」の2つに分類される。

「言い切っている発話」は、「デス・マス体発話」と「ダ体発話」に分けられる。ただし、応答詞だけの発話（「はい」、「ええ」、「うん」、「いいえ」、「いいや」、「いや」）は言い切っている発話であるが、そのスピーチレベルの分類基準がまだ一定していないので、分析対象から除外する。「言い切っていない発話」は、スピーチレベルを示す表現形式が発話末に見られず、スピーチレベルの判定ができないので、「中途終了型発話」とし、「デス・マス体発話」でも「ダ体発話」でもないとする。よって、本稿における発話のスピーチレベルは「デス・マス体発話」、「ダ体発話」、「中途終了型発話」の3つである。

5. 母語会話における「ダ体発話」へのシフト

本稿では2節で触れた陳（2003）をもとに、学習者の会話と比較分析を行っていく。

陳（2003）は、「デス・マス体発話」の使用が基本となっている初対面母語会話8組を資料にしたものである²。その8組における全発話数は3467個あり、スピーチレベル別に見ると下記の通りとなる。

「デス・マス体発話」：2478個（71.5%） 「中途終了型発話」：466個（13.4%）

「ダ体発話」：523個（15.1%）、そのうち「ダ体」へシフトして、そのまま続けて使われた「ダ体発話」（以下、シフトしたままの「ダ体発話」）73個

この研究では、シフトを同一話者のスピーチレベルに見られる切り替えと規定し、シフトが行われていると判断された450個（523-73）の「ダ体発話」について分析した。その結果、表3の通り、3種類に整理できる8つの状況で「ダ体発話」の出現率が最も高く、「ダ体発話」へシフトしやすいと認定された。状況①～⑧で現れた「ダ体発話」は計200個あり、シフトと判断された「ダ体発話」全体の44.4%（200/450）を占めている。

この8つの状況で「ダ体発話」へシフトしやすい理由として、状況①～⑥は情報の受信や整理を行っているもので、話者の意識が相手に対する配慮よりも情報処理に向けられやすいためであり、⑦と⑧の感情の表出は、相手のいない時と同じ「ダ体」の使用によって、飾り気のない率直な感情が伝わるためであると述べた。そして、こうした状況でのシフトは相手に失礼にならないというこ

とを母語話者は無意識に心得ており、その状況の特性を利用して「ダ体」を使うことによって、相手に対する親しみを表し、話しやすい雰囲気を作り出していることも述べた。

[表3 母語会話における「ダ体発話」ヘシフトしやすい状況とスピーチレベル別の発話数(陳2003)]

		「ダ体発話」		「デス・マス体発話」		「中途終了型発話」		計
(1) 情報の受信を示す時	①相手の発話の一部を繰り返す時	30	75.0%	7	17.5%	3	7.5%	40
	②先取りをする時	21	61.8%	12	35.3%	1	2.9%	34
(2) 情報の整理を表す時	③自己発話に対する補足・例示をする時	41	51.9%	11	13.9%	27	34.2%	79
	④情報内容の自己訂正を行う時	8	100.0%					8
	⑤何かを思い出しながら話す時	36	83.7%	5	11.6%	2	4.7%	43
	⑥適切な表現を模索する時	16	88.9%	2	11.1%			18
(3) 感情の表出を行う時	⑦相手の発話内容に感嘆を示す時	26	74.3%	9	25.7%			35
	⑧自分の心情を吐露する時	22	95.7%	1	4.3%			23
合計		200	71.4%	47	16.8%	33	11.8%	280

注：比率は3つの発話のタイプの合計に対するものである。

6. 結果と考察

6.1 発話のスピーチレベルの分布

4節で述べた発話のスピーチレベルの分類に従い、8名の学習者における発話のスピーチレベルの分布を調べた。表4はその結果を示すものである。

本稿では、1つの会話においてある話者に最も多く見られたスピーチレベルを、当該話者にとっての「会話の基本スピーチレベル」(以下、「基本レベル」とする。「基本レベル」の設定には次の2つの利点があると考えられる。第1に、会話の場面、相手との関係、話題に対する話者の捉え方が見えてくる(三牧, 1993) こと、第2に、「基本レベル」以外の

[表4 学習者におけるスピーチレベル別の発話数]

		「デス・マス体発話」		「ダ体発話」		「中途終了型発話」		計
TM1	対JM1	271	59.8%	134	29.6%	48	10.6%	453
	対JF1	202	76.5%	35	13.3%	27	10.2%	264
TM2	対JM1	76	24.7%	212	68.8%	20	6.5%	308
	対JF1	44	21.7%	147	72.4%	12	5.9%	203
TM3	対JM1	179	79.2%	14	6.2%	33	14.6%	226
	対JF1	167	80.7%	14	6.8%	26	12.6%	207
TM4	対JM1	225	62.8%	108	30.2%	25	7.0%	358
	対JF1	136	58.4%	83	35.6%	14	6.0%	233
TF1	対JF1	95	67.9%	24	17.1%	21	15.0%	140
	対JM1	284	55.7%	133	26.1%	93	18.2%	510
TF2	対JF1	72	35.8%	89	44.3%	40	19.9%	201
	対JM1	49	15.4%	218	68.6%	51	16.0%	318
TF3	対JF1	68	43.6%	85	54.5%	3	1.9%	156
	対JM1	75	44.4%	84	49.7%	10	5.9%	169
TF4	対JF1	137	68.8%	36	18.1%	26	13.1%	199
	対JM1	104	51.5%	61	30.2%	37	18.3%	202
総数		2184	52.7%	1477	35.6%	486	11.7%	4147
編掛け以外の学習者の計		1800	64.5%	642	23.0%	350	12.5%	2792
編掛けの学習者の計		384	28.3%	835	61.6%	136	10.0%	1355

注：1.比率は3つの発話のタイプの合計に対するものであり、小数第2位を四捨五入して求めた。
2.編掛けがされている学習者は、「ダ体発話」のほうが多かったことを表す。

レベルの発話を有標として区別できることである。これは有標発話の使用機能、つまりスピーチレベル・シフトの機能を解明する上で有効な方法である(宇佐美, 2001)。

表4から、「基本レベル」が「デス・マス体発話」である学習者が5名、「ダ体発話」である学習者（表4で網掛けがされている者）が3名いることが確認できる。

「基本レベル」が「デス・マス体発話」である5名の学習者は、（外見や会話内容から推測する）相手の年齢よりも、初対面であることに配慮していた。一方、「ダ体発話」を「基本レベル」とする3名の学習者は、「自分のほうが年上だろうと思った」（TM2）、「友達同士のような会話だから」（TF2）、「スピーチレベルに対する直感がなく、どのスピーチレベルが適切かは分からなかった」（TF3）とそれぞれ異なる理由を挙げた。初対面会話では、疎の関係を重視して「デス・マス体」になる場合と、仲間意識表示のため、または上位的立場をアピールするために「ダ体」になる場合がある（三牧, 2002）が、上級学習者にも同様の選択基準が働いていることが分かった³。ただし、スピーチレベルのことを意識せずに会話していたTF3のような上級学習者もいるので、スピーチレベルとそのシフトに対して、学習者の意識化を促す指導が必要であろう。

本稿は母語会話と比較するため、以下では分析対象を「基本レベル」が「デス・マス体発話」となっている者（TM1, TM3, TM4, TF1, TF4の5名）に限定する。

6.2 「ダ体発話」へシフトした回数

「デス・マス体発話」が「基本レベル」となっている5名の学習者における「ダ体発話」は、表4に示したように計642個ある。しかし、そのうちシフトしたままの「ダ体発話」が計140個あり、「ダ体発話」の21.8%（140/642）を占めている。この比率は陳（2003）における母語会話の14.0%（[523-450] / 450 = 14.0%）より7.8ポイント高かった。このことは、学習者のほうが一旦「ダ体発話」へシフトすると元の「基本レベル」へ戻るのが母語話者より遅れること、つまり「ダ体発話」を多く連続使用していることを意味する。これはスピーチレベル・シフトの制御が十分にできていない上級学習者の存在を示唆する結果である。

次節から「ダ体発話」へのシフトについて分析するため、シフトしたままの140個の「ダ体発話」は除外する。よって、以下では502個の「ダ体発話」が分析対象となる。

6.3 「ダ体発話」へシフトした状況と問題点

本節では、まず5節の状況①～⑧で学習者の発話がどのくらい現れているかを分析する（6.3.1節）。次に、状況①～⑧にあてはまらない「ダ体発話」を分析し、その問題点を3つ指摘する。第1に「助けを求める時」という状況での「ダ体発話

話」へのシフトは心的距離の短縮にならないこと（6.3.2節）、第2に引用内容を表出する時に見られるスピーチレベルの問題（6.3.3節）、第3にスピーチレベルと終助詞の共起に見られる問題（6.3.4節）、の3点である。これらはいずれも日本語能力の不足に起因すると思われる。

6.3.1 状況①～⑧におけるスピーチレベルの分布

5節で述べた状況①～⑧に現れた学習者の発話を次の表5に整理した。

[表5 状況①～⑧における学習者のスピーチレベル別の発話数]

		「ダ体発話」		「デス・マス体発話」		「中途終了型発話」		計
(1) 情報の受信を示す時	①相手の発話の一部を繰り返す時	51	56.0%	30	33.0%	10	11.0%	91
	②先取りをする時	18	54.5%	10	30.3%	5	15.2%	33
(2) 情報の整理を表す時	③自己発話に対する補足・例示をする時	29	50.9%	4	7.0%	24	42.1%	57
	④情報内容の自己訂正を行う時	1	50.0%	1	50.0%			2
	⑤何かを思い出しながら話す時	42	93.3%	3	6.7%			45
	⑥適切な表現を模索する時	7	63.6%	4	36.4%			11
(3) 感情の表出を行う時	⑦相手の発話内容に感嘆を示す時	2	22.2%	7	77.8%			9
	⑧自分の心情を吐露する時	11	78.6%	2	14.3%	1	7.1%	14
合計		161	61.5%	61	23.3%	40	15.3%	262

注：比率は3つの発話のタイプの合計に対するものである。

表5から分かるように、僅か1例か2例しかない状況もあるものの、この8つの状況すべてにおいて、学習者も「ダ体発話」へのシフトを起している。ただし、5節の表3で見た母語会話における「ダ体発話」の出現率と比べると、次の3点で相違が見られる。

[1]「ダ体発話」の全体的な出現率 状況①～⑧における学習者の「ダ体発話」は計161個で、シフトした「ダ体発話」の総数502個の32.1%に相当する。一方、5節で報告したように、母語話者では状況①～⑧で「ダ体発話」にシフトした比率は44.4%である。その差は12.3ポイントで、学習者のほうが少ない。これは、状況①～⑧で「ダ体発話」へシフトしてもよいことが学習者はまだ十分に分かっていないことを示す結果だと思われる。

[2]状況⑦における出現数、及び「ダ体発話」の出現率 「相手の発話内容に感嘆を示す」発話は9例あるが、そのうち2例しか「ダ体発話」にシフトしていない。「ダ体発話」へのシフト率は22.2%と低く、学習者の場合には状況⑦で「ダ体発話」へシフトしやすいとは言えない。

[3]状況④における「デス・マス体発話」の出現 「情報内容の自己訂正を行う時」は計2例しかない。そのうちの1例は「ダ体発話」であるが、例が少ないため、シフトしやすい状況かどうかは判断できない。

母語会話では表3の通り、状況④では100%「ダ体発話」にシフトしている。しかし、学習者では「デス・マス体発話」を用いている例が観察された。それ

を例1として示す。この例1では、TM3が自分の家族のことについて話している。

例1 (会話5より)

TM3:孫の面倒を[うん]みたり[うん]少し口喧嘩でもしたりして[=JM1の
笑い]それで、毎日忙しい<じゃない>[>]+/.

JM1:<かもしれない>[<][=!笑い]。

TM3:+,ですかね。

JM1:そうか、そうかもしれないですね。

TM3:そう、そういう意味で[えー]割と、あっ、よかったなって<思いま
すね>[>]。

JM1:<うーん>[<]うん、うん、うん、うん。

→1 TM3:あと、妹の実家、あっ、実家じゃないですよ。

JM1:うん。

TM3:嫁先ですか？

JM1:はい、はい。

→2 TM3:嫁先という表現はいいかな？

JM1:えーとね、嫁入り先ですね。

TM3:あ、嫁入り先[はい]のほうは[はい]近いから[うん]ま、30分
<30分以内で>[>]車で行きますので、戻ってきますし。

例1では、TM3の話は結婚して旦那さんの家族と一緒に住んでいる妹のことになっていく。その際、「実家」が間違いだと気づき、「(前略) あっ、実家じゃないですよ。」と「デス・マス体発話」で自己訂正を行っている(→1の発話)。TM3が自己訂正をしていると判断できたのは、発話の途中で「あっ」(下線を引いてある箇所)という気づきの表現が見られたからである。

しかし、TM3はこの状況で好ましいスピーチレベルを用いているとは言えない。例1にあるTM3の→1の発話は、話者自身に向かう自己訂正をしているものであるため、「ダ体」のほうが好ましいと思われる。それは5節の表3に示したように、この状況で母語話者が100%「ダ体」で発話していることから窺える⁴。

5節で述べたように、この8つの状況で「ダ体発話」へシフトしても失礼にならないという特性を日本語母語話者は知っており、その特性を利用して相手に親しみを表し、話しやすい雰囲気を作り出すというコミュニケーション効果を生み出している。しかし、本節の分析から分かるように、状況①～⑧における学習者の「ダ体発話」の全体的な出現率が母語会話より低いこと、状況⑦で「デス・マス体発話」の出現率のほうが高いこと、状況④で母語会話に見られなかった「デス・マス体発話」が現れていること、の3点で母語会話との相違が見

られた。こうしたことから、学習者はこの8つの状況で「ダ体発話」へシフトしてもよいことや、そのシフトが上記のようなコミュニケーション効果をもたらすことがまだ十分に分かっていないと思われる。

6.3.2 助けを求める時とその問題

前節では、状況①～⑧で学習者が「ダ体発話」にシフトした比率は32.1%であることを報告した。残りの7割ほどの発話をさらに分析した結果、「ダ体発話」にシフトしやすい状況として、「助けを求める時」が抽出できた。

助けを求める時とは、2節の先行研究で見たように、話者が使っている表現に自信がないと感じた際、相手に確認してほしい、または教えてほしいと助けを求めている状況である。この状況における「ダ体発話」へのシフトは、陳(2003)の母語会話には観察されなかった。ただし、日本語母語話者でも知らない地名や人名、あまり詳しくない相手の専門分野関係の単語などの場合だと、助けを求める際に「ダ体発話」へのシフトを起こす可能性がある(佐藤・福島, 2000)と考えられる。

【表6 助けを求める時の学習者のスピーチレベル別の発話数】

「ダ体発話」		「デス・マス体発話」		「中途終了型発話」		計
15	88.2%	1	5.9%	1	5.9%	17

この状況で見られた学習者のスピーチレベル別の発話数は表6に示す通りである。表6から、「ダ体発話」の出現率が88.2%に達しており、ほかのレベルの発話より格段に高いことが分かる。実例として、上の例1における「嫁先という表現はいいかな? (→2の発話)、及び次の例2が挙げられる。

例2 (会話15より)

JF1:<辛い><[<]んですか?

JF1:あんまり辛くない?

TF4:うん、辛くないんです[うん]うん、ちょっと。

TF4:でも味は濃いですね。

JF1:うーん。

TF4:うん。

TF4:で、例えば、あのーyyyっていうの、あのー、素麺に、日本の素麺みたいなもので[えー]あのー、ちょっととろみをと、あって[えー]あのー、蛎とか+。

%com:yyyは台湾語で話された。

JF1:かき。

TF4:かき、かき、かき<かき>[>]+。

JF1:<かき>[<]。

→ TF4:+,かき。

%com:上記の発話は何回か「かき」のアクセントを変えて言われている。

JF1:ええ、貝の+...

TF4:[=!笑い]。

JF1:うん+/。

TF4:蛎を入れて[うん]うん、すごくおいしいんです。

「助けを求める時」に見られた「ダ体発話」へのシフトは、2節で見たように、佐藤・福島（2000）では発言の効率化を計るもの、サバティニ（2001）では心的距離の短縮を示すものと見なされている。しかし、これについては別の観点からの説明も可能である。

日本語は学習者にとっては母語ではないので、必然的に日本語能力に限界がある。これは、例1と例2で学習者が相手の母語話者に助けを求めていることから窺える。助けを求める時に現れた「ダ体発話」へのシフトは、伝達内容の事柄的側面のほうに気を取られているため、スピーチレベルのことまで注意が払えないということがその原因とも考えられる。

この状況は、相手への配慮よりも情報処理のほうに意識が向けられやすいという点で状況①～⑥と似通っている。しかし、状況①～⑥で起きた「ダ体発話」へのシフトは、相手に親しみを表す、または話しやすい雰囲気を作り出すというコミュニケーション効果があるのに対して、学習者にしか見られなかったこの状況における「ダ体発話」は、そのような効果をもたらしていない。それは、状況①～⑥が自己向けの独り言的な発話を許すのに対して、「助けを求める時」の発話は相手に働きかけをするものなので、独り言に聞こえない「ダ体発話」で行うと失礼になってしまう恐れがあるからである。このことは、TM3の「嫁先という表現はいいかな？」（例1における→2の発話）からも窺える。TM3の→2の発話は音量が落とされず、下降音調にもなっていないため、独り言のように聞こえず、質問だと受け取られる⁵。従って、同じ情報処理への意識の集中と言っても、「助けを求める時」の学習者の「ダ体発話」は相手に親しみを表す、または話しやすい雰囲気を作り出すというコミュニケーション効果は期待できないであろう。

6.3.3 引用内容を表出する時の問題

前節で述べた「助けを求める時」以外に、引用内容（第3者の発話あるいは自分の思考）を表出する時、そのまま言い終わっているという例も観察された。これも言語能力の不足による問題である。

日本語母語話者は、引用内容を表出する時、それに「と言う／思う」などの

引用動詞⁶、または助詞の「と／って」を付ける。例えば、例3では「ダ体発話」、例4では「デス・マス体発話」、例5と例6では「中途終了型発話」で言い終わっている。

例3(会話15より)JF1:私、きっと伊勢神宮は熱田よりもずっと人が多いんだと思ってた。

例4(会話1より)JM1:昭和のでも、10年、10年代ぐらいだと思いますよ。

例5(会話6より)JF1 :はい、わかりましたとか言って+...

例6(会話15より)JF1 :時々お菓子の感覚、甘さの感覚が国によって違うなって+...

しかし、学習者には例3～例6に見られるような表現以外に、引用内容だけで言い終わっている例も観察された。次の表7に陳(2003)の母語会話における母語話者、及び本稿の学習者における引用内容を表出する時に見られたスピーチレベル別の発話数を示す。

[表7 引用内容を表出する時におけるスピーチレベル別の発話数]

		「ダ体発話」		「デス・マス体発話」		「中途終了型発話」		計
母語話者	引用動詞や助詞で言い終わる時	4	2.8%	87	60.8%	52	36.4%	143
学習者	引用動詞や助詞で言い終わる時	17	12.2%	83	59.7%	30	21.6%	139
	引用内容だけで言い終わる時	9	6.5%	—	—	—	—	

表7から、引用内容だけで言い終わっている例は学習者にしか見られなかったことが確認できる。次の例7が実例として挙げられる。この例では引越しの大変さが話題となっている。

例7(会話10より)

TF1:だから、なんか、こ、ちょっと去年あたりは[うん]あの一、修士課程卒業して[はい]ま、もしかしたら台湾に帰るかもしれない[うん]って思ってたんですね[うん]。

TF1:で、あの一、その時も、あ一、ひ、まずはね、引越すこと[=!]笑い]

ちょっと<に、荷造りの>[>]+/。

JM1: <いやだなんて>[<]+...

→ TF1:+,ことはね、すごくいやな感じして[=!]JM1の笑い]どうしようかな。

TF1:で、なんか、あの一、結局、残ったんですね[はい、はい]。

例7でTF1は引越しのことについて話しているうち、「(前略) どうしようかな」と思っていることを話している。それは引用内容であるが、引用内容であることを示す「と思う」という引用動詞または「と／って」という助詞が付いておらず、そのまま言い終わっており、結果的に「ダ体発話」へシフトしている。

学習者に見られたこうした表現の原因として、次の2点が考えられる。

1点目は、台湾人学習者の母語である中国語と日本語の違いである。まず、助詞に関して言えば、日本語でこの場合に必要な助詞「と／って」に相当する中国語はない。次に、引用動詞は述語であり、その語順は中国語と日本語では逆である。つまり、中国語では引用内容の前に来るが、日本語ではその後になる。こうした違いがあるため、引用動詞または助詞の「と／って」を付けるのを忘れてしまうことがあるのではないと思われる。

ただし、2節の先行研究で述べたように、学習者におけるこの問題は、様々な母語の学習者を対象に調査した佐藤・福島（2000）でも報告されているので、学習者全般に見られる問題である可能性が大きいと考えられる。

2点目として、前の6.3.2節と同様のことが言える。つまり、学習者は日本語能力の不足により、伝達内容の事柄的側面のほうに意識が集中しているため、表現の文法形式のことで、さらにスピーチレベルのことまで気が回らなかったのだろうと思われる。

この問題はスピーチレベル・シフトの分析を通して明らかになったが、この状況に現れた学習者の「ダ体発話」を「デス・マス体」に変えればよいというわけではない。引用であることを示すには、引用助詞（＋引用動詞）が必要である。

6.3.4 スピーチレベルと終助詞の問題

学習者にはスピーチレベルと終助詞との使用関係にも問題が見られた。そこで、スピーチレベルと終助詞の共起について調べた結果、全体的に終助詞の「から／し」は「ダ体発話」との使用率が高いことが分かった⁸。母語会話との比較が本稿の趣旨であるため、以下の表8に陳（2003）の母語会話における母語話者、及び本稿の学習者における「から／し」のスピーチレベルとの使用分布を示して比較してみる。

[表8 「から／し」のスピーチレベルとの使用分布]

	から				計	し				
	「ダ体発話」		「デス・マス体発話」			「ダ体発話」		「デス・マス体発話」		
母語話者	17	35.4%	31	64.6%	48	21	60.0%	14	40.0%	35
学習者	41	66.1%	21	33.9%	62	24	75.0%	8	25.0%	32

本稿では発話末の「から／し」を接続助詞に由来する終助詞と見なしている。表8から、学習者は母語話者と比べて「から／し」の「ダ体発話」との共起率が際立って高いことが確認できる。その理由として下記のことが考えられる。

表8から分かるように、母語話者では「から」が「デス・マス体」と、「し」

が「ダ体」と多く使われているが、学習者の場合はどちらも「ダ体」と共に用いられることが多い。この違いには日本語教育の影響が考えられる。初級日本語教科書の例文を見ると、「し」の前ではすべて「ダ体発話」になっている⁹。「から」の例文では、「ダ体」と「デス・マス体」の両方が見られるが、教育現場では従属節は「ダ体」、主節は「デス・マス体」の複文を提示することが多いと考えられる。このような例文に触れていると、「から／し」と「ダ体」の結び付きが強化され、「デス・マス体」が要求される会話においても、意識的に「から／し」を「デス・マス体」に付けて発話することが難しいのではないかと思われる。表8の結果は日本語教育のこのような影響を示唆していると考えてよいであろう。

7. まとめと会話教育への示唆

本稿は初対面同士による接触会話を資料に、台湾人上級日本語学習者のスピーチレベルの選択、及び「ダ体発話」へのシフトに焦点をあて、陳（2003）の母語会話の結果と比較分析を行ってきた。その結果、1節で挙げた課題 i ~ iv に関して以下のことが判明した。

- I. 学習者の中には「基本レベル」が「ダ体発話」となっている者が3名いた。その中の1名はスピーチレベルのことを意識せずに会話している。「デス・マス体発話」が「基本レベル」である学習者においては、シフトしたままの「ダ体発話」の使用率が母語会話より高かった。これは、学習者がスピーチレベル・シフトを十分に制御できていないことを示唆する結果である。
- II. 状況①～⑧における学習者の「ダ体発話」の全体的な出現率は母語会話より低い。しかも、状況⑦では「デス・マス体発話」の出現率のほうが高くなっており、状況④では母語会話に観察されなかった「デス・マス体発話」の使用例がある。状況④⑦は、学習者に関しては「ダ体発話」にシフトしやすい状況とは認められない。
- III. 状況①～⑧にあてはまらなかった発話から、学習者にしか見られなかった状況として「助けを求める時」が抽出された。そのほか、引用内容を表出する時そのまま言い終わっており、結果的に「ダ体発話」へシフトした例も観察された。さらに、終助詞の「から／し」は母語会話より「ダ体発話」との共起率が際立って高いことが分かった。これらは、いずれも学習者の日本語能力の不足に起因すると思われる。
- IV. 母語会話と同じ状況で「ダ体発話」へのシフトが現れても、学習者のシフトは母語会話と同様に心的距離の短縮というコミュニケーション効果をもたらすとは限らない。

上記の結果から、上級学習者でも対人関係の調節にスピーチレベル・シフトが十分に活用できていないと言えよう。その原因は、学習者はスピーチレベル・シフトを十分に意識化していないためだと思われる。よって、上仲（1997）、佐藤・福島（2000）が指摘しているように、会話授業で日本語学習者にスピーチレベル・シフトについて関連する知識を提示し、意識化させるように指導する必要がある。

具体的に言うと、まず、スピーチレベルの選択に関しては、三牧（2002）で指摘されている基準（6.1節参照）を日本語学習者に熟知させる必要がある。「基本レベル」が「デス・マス体発話」である場合、「ダ体発話」の連続使用が失礼になってしまう恐れがあることについての説明も不可欠である。次に、「ダ体発話」へのシフトについては、そのシフトが起きやすい状況、それによって生み出せるコミュニケーション効果を理解させる。ただし、同じ情報処理への意識の集中と言っても、「助けを求める時」など相手に働きかけをする場合、独り言に聞こえない「ダ体発話」で行うと失礼になる恐れがあることも同時に提示する。

こうしたスピーチレベル・シフトに関する知識を日本語学習者に熟知させると同時に、会話授業で実際の会話を聞かせて解説し、かつ練習させることによって、日本語学習者はスピーチレベル・シフトの制御をより意識化し、そして適切に行えるようになってくるのではないだろうか。

8. 今後の課題

本稿の分析により、上級学習者でも適切な状況で「ダ体発話」へのシフトがうまくできていないだけでなく、適切に終助詞を使い分けることが十分にできていないという問題も判明した。しかし、本稿では「から／し」の分析に留まっている。今後スピーチレベルと終助詞の共起を始め、対人関係に影響を及ぼす表現を網羅的に分析して、より包括的に日本語学習者の問題点を把握し、日本語教育現場に還元できるような研究を行っていきたい。

注

- 1 佐藤・福島（2000：23）では「適語探索」と呼ばれている。
- 2 「会話の基本スピーチレベル」については、6.1節で述べる。
- 3 「ダ体発話」が「基本レベル」となっている3名の学習者の話し方に対しては、相手の母語話者から日本語の間違い以外に、特に違和感を感じなかったとの報告が得られた。これは、互いの年齢、社会的身分が近いからなのか、相手が日本語を母語としない日本語学習者だからなのかは現段階では不明なので、さらに調査する必要がある。

- 4 しかし、目上の相手など、より改まり度の高い会話だと「デス・マス体発話」で「情報内容の自己訂正を行う」ほうが好ましいと思われる。これに関しては、さらに調査する必要がある。
- 5 「嫁先という表現はいいのかな」のように、「かな」の前に「の」を入れ、下降音調で発音すれば、独り言に聞こえる。
- 6 引用動詞という用語は鎌田（2000）に従う。
- 7 本稿での終助詞の捉え方は、主に国立国語研究所（1951）、許（2000）を参考に、終助詞・終助詞的な用法を持つ表現を抽出した。会話資料で見られたものは「か／が／かな／から／けど（「けども／けれど／けれども」を含む）／っけ／さ／し／な／ね／もの（「もん」を含む）／や／よ」である。
- 8 ただし、「ダ体発話」としか共起しない「かな／な」を除く。
- 9 『An Introduction to Modern Japanese』（The Japan Times）、『日本語初歩』（凡人社）、『しんにほんごのきそ』Ⅰ&Ⅱ（スリーエーネットワーク）、『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE (NOTE)』Vol.1&2（凡人社）、『A COURSE IN MODERN JAPANESE』Vol.1&2（名古屋大学出版会）を調査した。

参考文献

- 足立さゆり（1995）「日本語の会話におけるスピーチ・レベル・シフト」『拓殖大学日本語紀要』第5号，73-87，拓殖大学留学生別科。
- 生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『言語』第12巻第12号，77-84，大修館書店。
- 上仲淳（1997）「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト—日本語母語話者との比較考察—」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』149-165，凡人社。
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』第662号，27-42，昭和女子大学近代文学研究所。
- 宇佐美まゆみ（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス』9-58，国立国語研究所。
- 大嶋百合子・Brian MacWhinney編（1995）『日本語のためのCHILDESマニュアル』McGill University。
- 鎌田修（2000）『日本語の引用』ひつじ書房。
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用例と実例—』国立国語研究所。
- 佐藤勢紀子・福島悦子（2000）『日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構とその指導法』平成10年度～平成11年度科学研究費補助金研究成果報

告書.

- サバティニ容子 (2001) 「日本語教師と留学生の談話—待遇レベル・シフトと異文化コミュニケーション—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第11号, 1-41, 関西外国語大学留学生別科.
- 田丸淑子・吉岡薫 (1994) 「日本語発話資料分析の単位をめぐる問題—第二言語習得過程観察の立場から—」 *The language programs of the International University of Japan : Working papers (Vol.5)* 84-100, Language Programs, the International University of Japan.
- 陳文敏 (1998) 「台湾人日本語学習者と日本語母語話者の発話末に見られるスピーチレベルシフト」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』57-62, 日本語教育学会.
- (2000) 「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話—表現形式及びその生起の理由—」『言葉と文化』創刊号, 125-141, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻.
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』第14号, 7-28, 国立国語研究所.
- 土岐哲他 (1998) 『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の多角的研究』平成6年度～平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- 許夏玲 (2000) 『話し言葉の文末におけるモダリティの表現形式—「接続助詞」「条件形」「第二中止形」「引用助詞」—』名古屋大学大学院博士学位論文.
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 第I部門』第42巻第1号, 39-51, 大阪教育大学.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』第5巻第1号, 56-74, 社会言語科学会.
- Ikuta, Shoko (1983) Speech Level Shift and Conversational Strategy in Japanese Discourse. *Language Sciences (Vol.5 No.1)*. 37-53, The International Christian University Language Sciences, Summer Institute, Mitaka, Tokyo, Japan.